

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	東京都大田区蒲田 1-2-13
園名	アスク蒲田一丁目保育園

1. 活動のテーマ

Space(宇宙)

<テーマ>

<テーマの設定理由>

星座の図鑑や地球儀があるため星や惑星に興味を持つ姿が見られていた。そこから宇宙や惑星についての興味をさらに広げたいと考えた。また、自分の誕生日が分かるようになり、星座の話に繋がっているため英語を交えて触れ、興味関心を深める機会を設けることにした。

2. 活動スケジュール

6月から1月まで行い、月に1回ネイティブの講師を招致し他国の文化に直接触れる機会を創出することで深く探究活動ができるようにした。その時点での子どもたちの興味関心をもとに問いかけや内容を考え、子どもたちの反応や言葉によって次回の内容を柔軟に変えていけるようにした。

6~7月・・・太陽系について知ろう

8月~9月・・・衛星や星座について知ろう

9月~10月・・・宇宙飛行士やUFO、エイリアンについて知ろう

11月・・・地球について学びを深めよう

12月~1月・・・恐竜について知ろう

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・小学館の図鑑 NEO まどあけずかんシリーズうちゅう・・・宇宙についての知識を深めたり、英単語に触れたりするために使用
- ・学研の図鑑 LIVE 宇宙、学研の図鑑 LIVE 星と星座、小学館の図鑑 NEO 宇宙
- ・・・地球以外にどのような惑星や星があるのかを知るために使用日
- ・ぬりえ・・・活動を通して感じたことや考えたことを自分なりに表現するために使用
- ・マナカルティーの宇宙科学絵本・・・宇宙へのきよみの持ち始めのアプローチとして使用。また一つの星について学びを深めるために使用
- ・小学館図鑑 NEO 恐竜・・・日頃から子どもたちが恐竜の種類や生態を知るために使用
- ・イラストカード・・・星や恐竜のイラストと名前を載せ、種類を知ったり違いを見比べたりするために使用

4. 探究活動の実践

【3歳児実施分】

問いを考える：宇宙に存在している星について「どれくらいの大きさかな?」「この星はどんな色だろう」と問い、英語を用いながらそれぞれの特徴や違いをみんなで考えた。天の川や隕石、宇宙飛行士、ロケットなど宇宙にまつわる物を英語ではどのように発音するのか問いを重ねた。また、星座や惑星を自由に表現してみようと提案し、マナカルティーの宇宙科学絵本や小学館の図鑑 NEO まどあけずかんシリーズ うちゅう、小学館の図鑑 NEO 宇宙、学研の図鑑 LIVE 宇宙、学研の図鑑 LIVE 星と星座を参考にオリジナルのものを考える機会を設けた。活動を進める中で、地球の絵本に興味を持っていたため「どのように誕生したのかな?」「今と昔ではどんな違いがあるかな?」と問いかけた。地球には昔恐竜がいたことを知り、「どんな恐竜がいたのか」「どんな生活をしていたのか」という問いが生まれた。

探究活動の様子：導入として惑星のイラストカードを使用してそれぞれの知識を深めた。英語講師から英語での名前を教えてもらうと「Mercury」「Neptune」真似て発言したり、大きさや温度、色について問われると「Big!」「Hot!」「Yellow」と身振りを加えながら特徴について英語で表現したりする姿が見られた。惑星を知る中で今自分たちが住んで

いる場所が「地球」という一つの星と知った時には、驚く様子が見られた。グループ毎に惑星や地球、宇宙人など英語講師に教わった英単語を基に、グループ毎にぬりえを使用して自由な表現活動を行った。惑星のぬりえでは「こうしようかな」と子ども同士で発想を共有していた。また、小学館の図鑑 NEO まどあけずかんシリーズ うちゅう、小学館の図鑑 NEO 宇宙、学研の図鑑 LIVE 宇宙、学研の図鑑 LIVE 星と星座、マナカルティエの宇宙科学絵本を参考にして実物を表現しようとする姿も見られた。地球のぬりえでは「地球には海と陸があるんだよ」と保育者が伝えると、「地球には海があるけど、家の周りにはないね」と自分たちの生活圏との違いに気付く子もいた。また、宇宙人のぬりえでは「こんな顔にしたよ」と互いに見せ合い、想像を膨らましていた。活動が進むにつれて、「今まで学んできた中でどれをもっと知りたい？」と聞くと、自分たちの住む「地球」と答える子が多かった。マナカルティエの宇宙科学絵本「ちきゅう」を通して地球の誕生を知り、人が住むずっと前の地球についてグループ毎に調べて学びを深めた。かつて「恐竜」が住んでいたことを知るとそれに興味を示し、英語での発音の仕方を積極的に学んで真似をしたり、小学館の図鑑 NEO 恐竜から情報を得たり、英語講師とジェスチャーゲームをしたりしながら様々な種類の恐竜や成長過程について知る事ができていた

ふりかえり(保育士の気付き)：宇宙という壮大なテーマから、自分たちの住む「地球」、そして太古の「恐竜」へと段階的に焦点を絞っていく事で、繋がりを感じながら探求を進めることができた。単に知識を得るだけではなく、「Big」「Hot」と特徴を英語で表現してみようとする意欲的な姿が随所に見られるようになった。視覚的な情報が得られる絵本やイラストカードを効果的に使用したことで、宇宙の広がりや地球の成り立ち、恐竜の生態についても子どもたちなりに具体的なイメージを持って理解を深めることができた。さらに、グループ毎にぬりえや自由な発想でのオリジナルのお絵描きを取り入れた事で、探究を進める中で得た知識が子どもたちの想像力と結びつき、より豊かな表現力へと繋げることができた。一人ひとりが図鑑や絵本を片手に「本物」を追求したり、一方で自分だけの惑星や宇宙人、恐竜などを考案したりと、事実に基づいた学びと自由な創造性が混ざりあった活動となった。

【4 歳児実施分】

問いを考える：宇宙に存在している惑星や星にはどのようなものがあるのか、「この星はどんな色かな?」「どちらの星が大きいかな?」と声を掛けながら、それぞれにどのような違いがあるのか英語での表現を交えながら考えた。学んだ事柄に沿ってぬりえやお絵描

きの活動をすることを保育者が提案し、どのように表現するか考える機会を設けた。地球について学んだ際に恐竜が住んでいたことを知り、興味を寄せる姿が見られたため「どんな恐竜がいたのかな?」「英語ではどんな名前なのかな?」と知識が深まるように問いを重ねた。

探究活動の様子：宇宙には様々な星や惑星がある事を知り、英語講師に教わった星の名前が小学館の図鑑 NEO まどあけずかんシリーズうちゅうに載っているかを自ら進んで調べる姿が見られた。他にも学研の図鑑 LIVE 宇宙、学研の図鑑 LIVE 星と星座、小学館の図鑑 NEO 宇宙を開いて詳細な知識に触れる事で、学びを確かなものにし、それをぬりえやお絵描きなど自由な創作活動へと繋げていった。お絵描きでは、太陽系の図をじっくり見ながら「地球みたいにする」「お花でいっぱいにして」と自分なりのテーマを決めて描くことを楽しんでいった。また、身近な存在である地球や太陽、月などを図鑑の中から探し当てる事で、宇宙をより身近なものとして捉えていた。さらに宇宙人がいることを知り、オリジナルの宇宙人を作成した。UFO を描いたり、「寂しくならないように」と別の宇宙人を描き加えたりする姿があった。宇宙というテーマが壮大であったため「もっとたくさん知りたい惑星や星はある?」と保育者が聞くと、「地球」に興味を示していた。マナカルティーの宇宙科学絵本を通して昔恐竜が住んでいたことを知り、恐竜にも関心を寄せ、小学館の図鑑 NEO 恐竜を使用して深掘りする姿が見られた。「どんな恐竜を知ってる?」と聞くと「ティラノサウルス」「ステゴサウルス」など様々な恐竜の名前を発言していた。英語講師に恐竜の英語名を教わると、発音に苦戦する場面も見られたがゆっくり真似をして発音しようとする姿が見られた。さらに英語講師から恐竜の成長過程や特徴を教えてもらい、グループ毎にジェスチャーで表現しながら知識を深めていった。

ふりかえり(保育士の気付き)：イラストカードや図鑑を自在に使用しながら、ぬりえやオリジナルのお絵描き、さらには体を大きく動かすジェスチャーゲームを展開した。言葉による理解にとどまらず、自らの動きや思考を能動的に加えたことで、宇宙や恐竜といった未知の世界に対する興味がより一層強まり、知識を深めていく事ができた。すくわくの学びを運動会でも存分に活かすことができた。「宇宙」を運動会のテーマとしたことで知識の習得だけで終わらず、表現活動に繋げることができた。また、ぬりえのプリントやオリジナルのお絵描きをする時には、あえて見本は見せず保育者の言葉による投げかけによって活動を進めた。視覚的な正解を提示しない事で、子どもたちは個々に自由な想像を広げ、自分なりのイメージを形にする機会を設けることができた。活動を積み重ねる中で「○○

描いてもいい?」「ハサミで切ってもいい?」と主体的な提案が次々と生まれ、想像力や表現力の高まりを感じられた。発音の難しい英単語に対しても、イラストやジェスチャーによって子どもたちの興味が引き付けられていた。慣れ親しまない単語でも、遊びや身振り・手振りを介することで自然と身につけ、自ら発信しようとする姿に繋がっていたのは発見だった。

【5 歳児実施分】

問いを考える：宇宙という壮大なテーマを出発点に「宇宙にはどんな星や惑星があるのか」について問い、宇宙への知識を深めていった。「どんな色?」「大きさは?」「この星は暑いのか?寒いのか?」などそれぞれの特徴に気付けるような問いを重ねた。また宇宙飛行士やロケットについても触れ「英語ではどのように発音するのか」と問いかけ、英語にも触れながら学べるようにした。次に自分たちが住む地球をテーマに「どのように誕生したのか」という問いを投げかけ、マナカルティエーの宇宙科学絵本や学研の図鑑 LIVE 宇宙、学研の図鑑 LIVE 星と星座、小学館の図鑑 NEO 宇宙を使用して発見を楽しむ機会を作った。その中で恐竜が住んでいたことを知り、進んで恐竜について学ぼうとする姿が見られたため「どのくらい種類がいるのか」「どのような特徴があるのか」「どのように成長するのか」と繰り返し問い、英語を使用しながら考えられるようにした。

探究活動の様子：マナカルティエーの宇宙科学絵本やイラストカード、学研の図鑑 LIVE 宇宙、学研の図鑑 LIVE 星と星座、小学館の図鑑 NEO 宇宙を通して惑星の位置関係やそれぞれの特徴を学ぶ中で、未知の世界に対する理解を深め、星ごとの違いをグループ毎に考える姿が見られた。それぞれの惑星を比較し、違いを問われると「Big だね」「こっちは Red」と英語を交えて答える姿が見られた。惑星だけではなく星座にも興味が広がり、実際に存在する星座を自主的に調べる姿が見られた。そこでグループ毎にオリジナルの星座作りを行うと、スマイルやハートなど創造力を膨らましながら表現を楽しんでいた。さらに星座早見表を用いて「自分の誕生日にどのような星座が見えるかな」と友だち同士で教え合い、新たな発見を共有して喜ぶ様子があった。活動を進める中で特に自分たちが住んでいる「地球」についても興味を持っていたため「地球についてもっと知ろう」と保育者から提案を受けると子どもたちも意欲を示していた。マナカルティエーの宇宙科学絵本「ちきゅう」を通して大昔の地球には恐竜が住んでいたことを知ると、恐竜について関心を寄せていたため、さらに恐竜へと焦点をしばった。様々な種類の恐竜を知り、英語講師にイラストカードを見せてもらおうと「この恐竜は small だね」「足が big だね」と特徴を英語で伝える

姿が見られた。自分だけの恐竜を考えてみようという保育者が提案すると「ティラノサウルスみたいにしようかな」と小学館の図鑑 NEO 恐竜を参考にすれば、「羽もあつたら強そう」と独創的なアイデアを形にする子もいた。

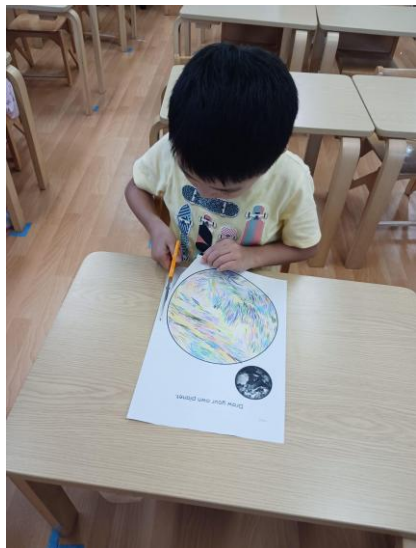
ふりかえり(保育士の気付き)：絵本やイラストカード、図鑑といった視覚的な教材を充実させたことで、子ども自身が進んでそれらを手に取り、興味の幅を広げることができていた。絵本でイメージを膨らませ、図鑑で正確な知識を得るという多角的なアプローチを取り入れた事で「一つの星」について掘り下げるだけでなく、他の星と並べて比較する視点も生まれた。その結果、大きさの対比や色・形などの細やかな特徴の違いにも気付くことができたため、豊富な教材を用意する大切さを感じられた。子どもの興味に合わせて、焦点を絞っていくことで子どもたちの知識を吸収するスピードが上がっていたのは発見だった。日頃から子どもたちの興味があることに目を向けることで、意欲的に一つの事柄を深掘していけると感じたため、子どもたちのつぶやきを大切にして「なんで？」という疑問や「知りたい」という気持ちを大切にしていきたい。

5. 活動の様子が分かる写真

3 歳児



4 歳児



5 歳児



とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	東京都大田区蒲田 1-2-13
園名	アスク蒲田一丁目保育園

1. 活動のテーマ

バランス力を上げよう

<テーマ>

<テーマの設定理由>

朝の体操を習慣化する中で、バランスを取る事に難しさを感じたり、生活の中で体幹が必要と感じる場面が見られたりする。屋上や近隣の公園、保育室など運動遊びをするスペースがあるため、それを十分に活用しながら体幹を身につけられるような遊びを取り入れ、より運動遊びの楽しさをより感じられるようにしていきたい。

2. 活動スケジュール

6月から1月まで行い、月に1回体操の講師を招致し体の動かし方について子どもたちの前で実演をしたり、探求心をかき立てたりするような助言をもらった。また、その時点で子どもたちの興味関心を基に、保育士と体操講師と共に問いかけや内容を考え、子どもたちの反応や言葉によって次回の内容を柔軟に変えていけるようにした。

6月～9月：片足立ちをしてみよう、バランス力を上げる遊びを考えてみよう

9月～11月：平均台を上手に渡る方法を考えよう、マットや平均台を組み合わせる様々な動きをしてみよう

11月：道具を使わずにできる遊びを考えよう

12月～1月：やってきた遊びを組み合わせよう

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・平均台 木製（赤）・・・バランス力を鍛えるため
- ・らくらくマジックマット・・・平均台から落下した場合に衝撃を緩和させるため。
- ・縄・・・縄の上を歩くことでバランス力向上を目指すため。
- ・マーカー・・・片足バランスをする際に、立つ場所の目印として使用。
- ・跳び箱・・・平均台と組み合わせて使用し、多様な身体の動きを楽しめるようにするため
- ・ホワイトボード・・・子どもたちが考えた遊びを書き出すため。
- ・ケンパの輪・・・ケンケンをして片足でバランスを取る力を高めるため。

4. 探究活動の実践

【3歳児実施分】

問いを考える： 様々な道具を使用し、都度どのような体勢がバランスを取りやすいのか、何を意識すると良いのか問い、実践した。片足バランスをする時は「どこを見るとバランスがとりやすい？」「手の位置はどこがバランスとりやすい？」と問いを投げかけてグループ毎で考えた。らくらくマジックマットと平均台を使用した活動では「前と横向きではどちらが渡りやすい？」と問うことで色々な方法を試しながら自分なりの答えを見つけられるようにした。また「道具を使わずにできる遊びはある？」と問いかけることで、いつでも友だちとバランス力を高められる遊びができるようにした。

探究活動の様子：活動の導入では、体操講師と共に片足立ちでいかに体勢を維持できるかという点に焦点を当てて探究を進めた。バランスを保つための秘訣について考えてみようとして体操講師から言われると、グループ毎に意見を出し合い「前を見る」「手は横に広げる」「足を高く上げる」といった具体的なアイデアを出していた。実際に様々な方法を試行錯誤する中で、自分なりにバランスを取りやすい姿勢のコツを掴み、次第に静止状態を長く維持できるようになった。また、保育者がタイム設定をするのではなく、「何秒頑張れそう？」と聞き、自ら「〇秒間」と目標タイムを決めることで、それが強いモチベーションとなり、粘り強く記録に挑戦する姿が見られた。片足でのバランス感覚に自信が持てるようになった段階で、高さのある平均台と落下防止のらくらくマジックマットを導入した。

最初は高さに対する緊張感があったが、保育者が「手を繋ごう」と伝えると一歩ずつ慎重に前に進んでいた。ここでも「どのようにするとバランスが取れるか」と体操講師に問われ、「前を見た方が歩きやすい」「カニさん歩き（横歩き）の方がいい」など、自ら歩きやすい方法を導き出しながら取り組んでいた。経験を重ねるうちに高さへの恐怖心も薄れ、スムーズに渡りきる姿へと変化していった。さらに活動を広げ、ケンパや縄跳びを組み合わせることで動的なバランス能力の向上を図った。後半には道具を使わない遊びを考えてみる活動を行った。「片足で立ちながら友だちと手を繋ぐ」「背中合わせで立ち上がってみる」といった案が出たため、実践した。「一人の時とお友だちとゲームをする時とではどちらが難しかったか」と保育者が聞くと、後者の方に難しさを感じていたようだった。一人で立つ時とは異なる「他者と力を合わせる難しさ」に直面しながらも、互いに「もっとこうしよう」と意見を交わし、協力してバランスを保とうとする協同的な学びの姿が見られた。

ふりかえり(保育士の気付き)： どのようなポーズをとれば安定してバランスを維持できるのか、子どもたちと共にじっくりと思考を巡らせたことで、単に体を動かすだけでなく「どうすれば倒れないか」という仕組みを意識しながら、論理的に遊びに取り組む姿が見られたのは大きな収穫だった。一つひとつのバランス力を高める活動に対して、焦らずに十分な時間をかけて向き合える環境を整えたことで、子どもたち一人ひとりが自分の体の使い方を工夫し、できることを増やしていくことができていた。その中で、自分なりのコツを掴んだ子が自信を持って表現し、それを見た周りの友だちが「あんなふうにやってみたい」「次はこうしてみよう」と良い刺激を受け合い、新たな挑戦への意欲が連鎖していた。このような探究の視点を取り入れることで、子どもたちは困難な姿勢にも粘り強く挑むようになり、成功した喜びを分かち合うことでさらに意欲を高めていく姿へとつなげることができた。

【4 歳児実施分】

問いを考える：片足で上手にバランスを取るためには「足を高く上げていた方がやりやすい?」「手はどのようにしているとうまくバランスがとれるかな?」と意識するポイントを問い、色々な方法を試せるようにした。らくらくマジックマットと平均台を使用した活動では「正面と横向きではどちらが歩きやすいか」を問いかけ、歩きやすい方法を見つけやすくするためのヒントを提示した。さらに、バランスを取るゲームにはどのようなものがあるか考える機会を設け、実践し様々なバランスのとりかたを得られるようにした。

探究活動の様子： 体操講師と共にバランス力向上の導入として片足バランスを行った。片足でバランスを長く保つための方法について、腕の広げ方や上げる足の高さ、目を開けるか閉じるかなど、一つひとつ実際に試しながらグループ毎にバランスをうまくとる方法を考えた。「バランスを鍛えられそうな遊びは何かある？」と体操講師に問われ、時間をかけて考えた。ケンパやドンじゃんけんなど、これまでに経験した動きをサーキットに取り入れたり、「お友だちと興がるバランスポーズはどう？」という保育者の提案を聞いてそれに挑戦したりし、楽しみながらバランス感覚を磨いていった。らくらくマジックマットと平均台の活動では、「前向き歩き」と「カニ歩き」のどちらが歩きやすく、かつ速いのかを両方試してみた。結果、歩きやすさは人それぞれであるという発見に至り、その「楽しさ」を運動会のサーキット競技にも活かすこととした。バランスゲームにおいては、単なる「勝敗」にこだわるのではなく、「皆で一緒に長く続けられる方法を考える」ことを大切に伝えてきた。その結果、普段は先に足がついてしまったり負けたりすると悔し涙を流していた子ども、今回の活動では長く続けている友だちの姿を見て「〇〇ちゃんの方が長くできているね」「次は〇〇回を目指してやってみよう」と、相手を認めたり次への目標を立てたりする前向きな言葉が多く聞かれるようになった。

ふりかえり(保育士の気付き)： バランスの取りやすさには個人差があるが、子どもたち一人ひとりが試行錯誤の中で「自分に合ったスタイル」を見つけていくことができた。勝負に執着しがちなゲームにおいても、「より長く続けるためには？」という視点を持つことで、負けた悔しさよりも「どう改善すれば次は勝てるか(長くできるか)」という前向きな思考へシフトしており、大きな成長を感じた。すくわくの探究時間だけでなく、運動会や戸外遊びといった日常の場面にもバランス遊びを取り入れたことで、生活のあらゆるシーンで自らバランスについて考え、挑戦する習慣が根付いた。

【5歳児実施分】

問いを考える： 片足バランスでふらつかない方法を問い、長時間体勢を維持できるような活動を行った。らくらくマジックマットと平均台を使用した際にどのような歩き方をすると、安定して歩くことができるかについて考え、様々な方法を実践した。さらに「バランス力が上げられそうなゲームは何かある？」と問いを投げかけ、子どもたちの思考力と実践力をより伸ばしていけるようにした。道具を使わずにできる遊びについても考え、「友だちと協力が必要なゲームはどうか」と伝えることで、別の角度からバランスについて考えられるようにした。

探究活動の様子：「片足立ちをして足を上げて足がついた方が負けのゲームしよう」と子どもたちからゲームの提案が出て、はじめは片足を後ろや横に上げて、そのままピタッと止まり。何秒止まれるか競争をした。それぞれが「重心」を意識して身体をコントロールしようとした結果、手を広げたり、手を組んだり、子ども自身がバランスを取りやすいポーズで行っていた。小グループに分かれて、どの姿勢が一番バランスを取れるか考え「フラミンゴのポーズ」「かかしのポーズ」「飛行機のポーズ」など名づけ、発表しあう姿があった。片足立ちで培った「バランス感覚」を、らくらくマジックマットと平均台を用いた活動でさらに発展させるためのテープで線を引いたり、飛び石マットを設置し移動バランスへと移行した。スタートとゴールを設定すると競争心や焦りがありバランスを意識できないことがあった。バランスを意識するためにもゴールは設けず（サーキット）を小人数で行った。だるまさんがころんだのリズムを取り入れることで、意図的に歩く・止まるが意識でき、バランスを取って落ちないことが大切ということを理解していた。さらに、らくらくマジックマットと平均台を使っただけの取り組みへの関心が高まり、前に向いて歩く子と横向きにカニ歩きのように歩く子に分かれた。「どうしてその歩き方をしたのか」保育者が聞くと前を向いて歩く子は「手を広げるとバランスが取れるから歩きやすい」との声があり、横向きの子は「横の方が平均台に足がいっぱいについているからフラフラしにくい」とグループ毎に考えて伝え合う姿があった。道具がない場所でもバランス遊びができるのか考えた。手押し相撲のような一人ではできないゲームをする中で、協力してできるバランスはないかと考える姿があった。すると「足を上げるのはどう？」と2人で足の裏を合わせてバランスをするのはどうかとの考えがあがった。「競争（勝ち負け）」から始まり、そこから「協力」へと遊びが変化した。さらに2人組では簡単すぎたため、少しずつ人数を増やすなど発展し、人数が増えるにつれて、上に上げるタイミングが合わず苦戦する姿があった。「どうやったら息を合わせられるか」保育者が聞くと『「せーの」って言うてからがいいんじゃない？』と声上がり、みんなで「せーの」と言うてから足を上げることにした。クラス全員でも行おうとしたが、うまくいかず丁度よい人数が4～5人が一番きれいでバランスを保つことができることに気付き、グループ毎に完成度を高めていった。

ふりかえり(保育士の気付き)：「バランス」というシンプルな遊びが、静と動や、道具を使うものと使わないもの、1人で行うものや複数人で行うものと、様々なものがあるのだと気付くことができた。また自分にとってやりやすいバランスが相手にとってもやりやす

いとは限らず、それぞれの違いに気づくことができたことで、「自分と友だちの違い」を認め合うことができていた。そして子どもたちがバランスを遊びやゲームに発展させて楽しむ中で、考えたことを自由に発表する姿があり、課題に対して「言葉と協力」で立ち向かう姿勢が見られた。「個」から「グループ」で行っている活動が、子どもたちの自由な発想の中で自然と集団になる様子は、年長ならではの姿だと感じた。

5. 活動の様子が分かる写真

3 歳児



4 歳児



5 歳児

